

新「能代市」の誕生を振り返る！ 「一体感づくりのため」

二ツ井町に、代々続き、昔ながらの手打ち一本で金物づくりの励む鍛冶屋があります。

道具類のほとんど何でも、注文に応じて作ってくれる腕のいい鍛冶屋として評判です。

一昔前は山林業などが盛んで、鍛冶の需要が多く、14軒もの鍛冶屋がありました。今は1軒になってしまいました。

鍛冶屋を営む安保新次郎さん、9代目となる誠喜さんに、最近の鍛冶事情のお話を伺いました。

以前は、林業に使うとび・なた・まさかり、農具など、営林署作業が盛んだったこともあり、注文に応じられないほどの仕事量でした。

それが、10年ぐらい前からは、山林業の落ち込みやいろいろな仕事の機械化が進んだことが原因で、昔から使われてきた道具類の注文は減り続けています。

最近の主力となっているのはガスボンベを活用した薪ストーブで、冬場は、ほとんどストーブ作りに専念しています。夜遅くまで作業が続く事も少なくありません。



また、マタギ用のナイフが全国誌で取り上げられたことがあり、県外の愛好家から注文が寄せられます。

薪ストーブは、鉄が肉厚で保温性に優れ、空気調整弁の工夫で薪が長持ちし、すすもあまり付かないことが評価されています。

第7回 安保鍛冶屋

手作りならではの
こだわりがあります

悩みは手間がかかり過ぎることで、一つ作るのに3日もかかりません。性分の方でないことですが、納得するまで徹底して手間をかけます。

このごろは、原材料の鉄の値段が高く、ストーブの値段と折り合わなくなってきたことにも苦労しています。

励みは、お客さんから寄せられる感謝の言葉です。「あなたが良く切れる」「25年前に買った薪ストーブをまだ使っている」と、声を掛けられることに誇りを感じています。

もうすぐ能代市と合併ですが、生活面では既に溶け込んでいると感じています。行政面でも一緒に仲良く「これからもよろしく」という気持ちです。お互いの思いやりが一番大切と思っています。



安保新次郎さん(左)と誠喜さん(右)



ガスボンベで作った薪ストーブ

のーろ道遙

歴史と民俗のあいだ

句碑(一) 「島田五空」

八幡神社境内の一面に石碑を囲った柵があります。その中に五空の句碑と、次回に述べる芭蕉の句碑があります。

五空は俳句の革新をめざして、秋田の石井露月らと交わり、日本派俳句雑誌『俳星』を創刊し、今日まで続く基礎をつくりました。印刷業を始め、明治二十八年に北羽新報の前身『能代商報』を創刊し、近代文化を切り開いた人でありましたが、明治末期から大正期にかけては県会議員になるなど、政治的な活動をした人でもありました。その生涯は、常に挑戦的でありましたが、深い教養に基づいていて、説得力があり、同志からの信頼が厚い人でした。五空は、昭和三年十二月二十六日に亡くなります。死の十日ほど前に吟じた句が句碑となっています。

可れ薦と 細り行く身や かせの音 五空

この夜は風が強かったらしく、八幡神社の松などが音を立てて五空の不安を募らせているようです。「かせの音」はそのことを言い、やせ細っていく我が身と、枯れ薦を重ね合わせて、死期の近づいたことを、五空は感じているようです。神社の近くの十方庵に臥せている五空は、だんだんこの世から離れていく自分を、客観的に見ようとしますが、それは愚かな身には及びもつかぬ事である、と述懐して人生を閉じます。

(古内龍夫)

